

希望と共に帰港した帆船「ナジェージダ」号



ネヴェリスコイ名称国立海洋大学の帆船「ナジェージダ（希望）」号が、日本海での調査を終えてウラジオストクへ帰港した。

調査の目的は、福島第1原子力発電所での事故発生後の放射線量調査。

「ナジェージダ」号は、1500 マイル以上を航行しながら、大気中の放射性物質を調査するため 250 回測定を行った。

「ナジェージダ」号に乗船したロシア科学アカデミー極東およびシベリア支部の学者、並びにロシア非常事態省の職員たちは、日本海で海水のほか様々な種類の海洋生物などのサンプルを採取して調査した。

調査では、放射性物質の量が基準値を超えたことは一度もなかった。

1 時間あたりの放射線量は平均で 8 - 12 ミクロレントゲンの範囲内に収まっていた。

今回の調査で責任者を務めたネヴェリスコイ名称国立海洋大学の学術作業に関する副学長で数学・物理学者のオレグ・ブキン教授は、「ロシアの声」からのインタビューに対し、次のように語った。

「ナジェージダ」号の甲板には、いくつかの実験室が開設された。高感度レーザー機器を用いて調査を実施した。ヨウ素 131、セシウム 134、セシウム 137 のラジオアイソトープの含有率を調べるための検査も行われた。今回調査された日本海においては、福島第1原発での事故が、大気中および海の表層における放射性物質の拡散による放射線レベルの上昇を招くことはなかったことを断言できる。

調査は成功した。我々は、自分たちの課題を遂行した。「ナジェージダ」号は、ウラジオストクに「希望」と共に帰港した！

「ナジェージダ」号による調査結果は、太平洋で調査を実施していた学術調査船「パーヴェル・ゴルジエンコ」号の調査データと合わせることによって、福島第1原発での事故後の放射線状況に関する全体像を明らかにすることができる。

一方で学者たちは、風向きが変わることで、ロシア沿海地方を含めた日本海へ放射性物質が運ばれる可能性があるため、モニタリングを繰り返し実施する必要があるとの考えを表明している。